

微妙に関わり合いながら

自然科学研究機構経営協議会委員
JT生命誌研究館長

中 村 桂 子

基礎生物学研究所。なんと折目正しい魅力的な名前でしょう。創成とか新領域とかシステムとか。何をやるのかよくわからない名前の学科や研究機関が流行している昨今、何の衒いもないこの名前が輝いて見えます。

基生研は、評議員として関わらせていただくなど、いつも外から関心を持ってきましたが、研究所の活動そのものについては多くの方がお書きになるとしますので、私にとっての基生研を書くことをお許し下さい。話は二つです。

第一は、1970年のことです。東京大学生化学科を定年退職なさった江上不二夫先生が三菱化成生命科学研究所を始められ、私もそこに参加させていただきました。江上先生はそれより少し前、学会議会議長の時に、生物学の基礎研究所の設立を国に進言なさっていました。物理学、化学に比べて、体系的な科学としての存在感に欠けていた生物学を、生化学、分子生物学を基盤にした科学として確立することの重要性を感じられたからでしょう。今でこそ、生命科学という言葉が日常語になり、21世紀は生命科学の時代などと言われていますが、1960年代に総合的な生物学の必要性を認識していた人は決して多くはなかったと思います。動物、植物、微生物という研究対象、遺伝や発生や進化などの生命現象、生化学、生理学などの方法論。これら既存の学問にある多くの壁を取り払い、生きものの本質を捉える研究ができる時代になったという認識です。

ところで、江上先生は、知る人ぞ知るせっかち。通常国立機関の設立に必要な長い時間が待てず、御自身の考え方をすぐに実現するために民間の研究所設立という新しい道を拓かれました。当時は今と違って、産学協同は悪の代表とされていましたから、ずいぶん思い切ったことをなさったものですが、とにかく生化学から細胞生物学、発生生物学、脳研究、生態学、更には社会的課題まで含む研究所が71年に始まりました。

それから6年後、生物学の方達の努力で実現化した研究所がどのような経緯で「基礎生物学」という名称になったのかは知りませんが、この名前には新しい挑戦が感じられます。事実、この30年間の基生研での研究は“生きものを知る”という基本を考え、しかも今の時代にやらなければならないことを行なうという姿勢があり、なんだか行方があやしい今の生物学に少々安心を与えてくれますが、少々なのという言い方は失礼かもしれませんが、それだけ実感があるというつもりです。

第二は、岡田節人先生です。基生研所長から機構長へという重責を務められる中で、基礎生物学とはなにか、基礎研究とは何かをみごとに示し具体化なさるのを少し離れた所から見て、惹きつけられました(他の所長、機構長の方たちが魅力的でなかったというわけではありません。私が自分自身と

くに惹かれたので生命誌という新分野を考え始め、研究とは何かということに関心が高まった時と重なっていたのです)。思いがけず、本当に思いがけず、生命誌研究館館長をお引き受けいただき、先生の下で仕事をする機会を得た幸運。今もなんとありがたいことであつたかと思ひつづけています。国立の機関とは違う可能性を持つ生命誌研究館という場で、先生が自然な形で出された、科学を文化として捉えたさまざまな考え方や具体的な言葉と活動は、教えられることばかりでした。国の研究所や大学でそれが可能であつたら、どれだけ面白いことになっていただろうかと思つたのもです。最近、“大事なのはカンや”とおっしゃった一言が基本の基本だと思います。現在の科学はそこからどんどん遠のいているように見えます。研究者の一人一人が、個性を出し、研究を楽しめるように、せめて基生研は、この味、この香りを出していただきたいと思います。

自分に引きつけた勝手なことを書きましたが、今基礎生物学は転換点、もう少し厳しい言葉で言うなら、一つの行き詰りにいるように思います。1970 年頃の分子生物学がそのような状況にあつたことを思い出します。多細胞生物にどう向き合うか。それは組換え DNA 技術と塩基配列解析という「技術」によって解決し、現在に続いています。この延長上で「生きもの」や「生きていること」の本質が見えてくるかどうか。それを考えなければならない時が来ているのではないのでしょうか。1970 年頃の行き詰りの時、分子生物学者はそれを意識し、悩み、考えました。ところが今は、そのような意識をもつ人が、あまり多くないような気がしてしかたがありません。前回、「技術」が解決し、思いがけない展開をもたらしましたが、今度もそうなのでしょうか。もう少し根本的な転換が必要ではないかと思います。生命誌研究館は、それを考えていますが、これぞというものはなかなか見えません。「基礎生物学」という折目正しい名前をもつ研究所が 30 年の歴史を踏まえて今求められている本質的な基礎生物学について考える場であって欲しいと願っています。